

北国抄

北国抄



原田康子

読売新聞社

北国抄

昭和四十八年三月十日 第一刷

著者 原田康子

発行者 松田延夫

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 千一〇〇

大阪市北区野崎町七七 千五三〇

北九州市小倉区明和町一の一 千八〇二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 ナシヨナル製本株式会社

定価 七〇〇円

目次

I 北国と私

- 中年の夢 9 春の雪 14 飼う 19 野の声 24 ポピンス小母さ
ん 29 健やかに 34 今夜はなにに 39 犬をつれて 44 働き遊
び 49 思い出 54

7

II 北国の冬

- スモッグの町 61 釧路の潮風 65 雪の降る街 69 北国から 72
釧路川のスケート 75 雪よ降れ 79 雪のくる前 82 ストーヴあれ
これ 87 私とスキー 90

59

III 北国旅情

- 春の札幌 95 運河と坂のある町 99 湿原 109 おくればせの登山 113
空沼岳 118 北海道五世 129 月夜の湖 132 タッコブ湖の秋 135 雨

93

の大雪	139
旅	158
国境の夜空で見た氷の星	144
函館の宿	155
下海岸の	

IV 北国の自然

苔と南瓜	165
シシャモの獲れる頃	173
十勝沖の大なまず	176
まゆ	163
みの実	184
スズランの季節	187
はまなす	192
北国の花	195
秋の	
木	198

V 北国雑感

色々な先生	205
男の指輪	209
初詣	212
一月生まれ	216
家庭の間	
題	220
柳に短冊	226
臆病風	230
泥棒	234
武勇談	237
地方で書	
くこと	242
うつりかわり	245
支局長	251

あとがき

装丁 重原保男
カット 二名ノリコ

北
国
抄

I
北
国
と
私

家政婦がしばらく休んでいて、家のなかがざらついている。

流しは食器の山である。灰皿は吸いがらでいっぱいだし、絨毯^{じゅうたん}は埃^{ほこり}っぽく、ピアノの蓋^{ふた}は埃で真っ白である。ガラスも白くもって、おもてを見るとさながら露^{もや}でも立ちこめたよう――。

私にはいそぎの仕事があり、私は一切かまわずに机に向かうのだが、さてペンを取りあげても、なにか落ち着かない。物置きかあばら屋のすみにすわりこんだような気分だ。私は煙草に火をつけ、コーヒーをすすり、また煙草に火をつけ、一時間たっても一行も書かず、一時間あれば流しだけでも片づいたのにと後悔して、エプロンをつけるのだが、そうするとあととはとめどがない。掃く、拭^ふく、みがく、洗う。さすがに仕事に気がなつてガラスのよごれにまで手はまわらぬものの、どうやら家のなか片づいて、人の住まいらしく

なつたころ、私はげんなり疲れて、そのあと小一時間はぼんやりしているのだった。

いったい、これはどうしたことだろうか。いつから私はこのように潔癖になったのだろうか。

二十代の頃の私は、かならずしもきれいい好きではなかった。きれいなのに越したことはないが、きたなくても平気だった。埃のなかで平然と本を読んだ。書き物をした。掃除というものは毎日したが、四角い部屋をまるく掃く式の掃除である。十坪そこそこの小さな借家に住んでいたから、あつという間に掃除は終わった。

机の上の埃をふっと吹きはらう、そんな無精をしたことさえある。舞い立った埃に私はちよつと顔をしかめ、しかし原稿用紙をひろげると、なんの抵抗もなく書きかけの小説のなかに没入することができた。

ときたま妹がよくれた家に顔を出した。

「うわっ、きたない」

妹は大げさにさけび、箒ほうきとはたきを引っぱりだして盛大に掃除をはじめ。

「えへへ……」と私は照れかくしに笑った。

私は自分に主婦としての才覚がないなどとは思ってもいなかった。掃除くらいわけなくできる。やる気さえ起こせば、だれよりも立派にできる。でも、そんなことで時間をつぶ

していてなんになる……。人生においてなにが重要で、なにが重要でないか、そこまで私は気負って考えていたわけではないが、しかしえらばれた者の傲岸ごうがんは私の身内に根をはっていたにちがいない。むろん当時の私は無名であった。

私は世に出ることができたから、あの頃の夢は一応かなえられたといつてよいだろう。生活環境がかわった。家を移り、手伝いをつかうようになった。

現在、住んでいる家は借家ではない。格別大きくはなく、小さくもない、まあ手ごろな住まいだとおもっているが、家のなかをととのえて置くには、人をつかわなくてはやっていけない。十坪そこそこの借家では取りちらかしていてもあまり目立たないが、居間、書齋、寢部屋と家らしい体裁のそなわった家では、少々のよごれでも目につくようである。かつて住んでいた借家は、小さいばかりかなり古びていた。こんなぼろ家を見がきたるところでどうなるものでもないという気持ちも私にはあった。自分の持ち家になれば、きれいにしておきたいのは人情だろう。塀へいのやぶれとか、屋根の傷みなども私はときどき気になるのである。

人をつかうことにも慣れてしまったのだろう。若い女中さん、年輩の家政婦と、これまで何人かの人をつかってきたが、だいたいは働きの正直な人たちだった。雇うがわの仮借のない目で見れば完璧とはいえないまでも、私は小さいな住まいのなかで暮らすこと

ができた。だからこんどのように、手伝いに休まれたりすると、突如として家のなかは廃屋の様相をおびるのである。

しかし、それより私は自分の生命力のおとろえを感じずにはいられない。いまの私には埃のなかで本を読み、物を書く元気はない。机の上の埃をふっとはらって、仕事に没入することはできない。

どんな事情があるにせよ、長年、身ぎれいにすごしてきたからにせよ、その事実には私に冷やりとさせられる。私は作家としての資格を失ったのではないか。作家にとって大切なのはデモニーッシュな情熱であり、その大切なものを失ってしまったのではないか。

しかしまた、私は考える。私はいま二十五歳ではない。三十代のなかばをすぎた。二十代ならともかく、中年と呼ばれる年齢の女が、埃のなかで執筆をするなど、考えただけでもぞっとするではないか。

よい仕事をしたという作家のだれしもが持つねがいをのぞくと、私にはいまこれといった夢はない。ただ私は美しく老いたい。たとえ二間の借家に住むようなことがあっても、二度と埃のなかにすわりたくない。清潔な肌着を着て、爪をいつもきれいにしている。老醜だけはさらしたくない。

埃のなかの二十代の私がみにくく思いかえされないのは、私が若かったからであろう。

私くらいの年齢になると、埃のなかでデモンと逢うのはむずかしい。どこで逢えるのかはわからないが。

あす、私は居間のガラス戸をみがこう。空が晴れてくれればよい。ガラス戸越しに裸木の梢こずえがすっきり見えるだろう。

雪がよく降る。きのう、おとといと降りつづいて、きょうはまた大荒れの吹雪である。けさはめずらしく早起きをした。暗いうちに起きだしてストーヴに火をたきつけた。煙突の奥で風がごうごう鳴り、窓ガラスに雪のあたる音がした。ぬれた砂でもたたきつけるような音だ。水分の多い雪なのだ。真冬に降る雪は、こんなあらあらしい音をたてない。音もなくしんと降るのが真冬の雪である。

室内もひところのように冷えきってはいない。洗面所にも氷は張っていない。こんなに雪が降っても、季節はやはり冬から春へと移りかわっているのだろう。この雪が春の前ぶれそのものだろう。春先には雪が多いものなのだ。

私の郷里の釧路は、北海道では雪の少ない地方である。太平洋岸なので、冬はからっと晴れた日が多く、ひたすら寒いのである。それでも、二月から三月にかけては、比較的雪